

キジ・ヤマドリ出合数調査等に関するヒアリング調査結果

1. 狩猟パトロールについて

(1) 福井県

1班4人程度(県職員、鳥獣保護員)全21班で福井県内の鳥獣保護区や休猟区、特定猟具使用禁止区域(銃) 猟場にて法令違反行為の取り締まりパトロールが実施されていた。

同行させていただいた班は、まず猟場(河川敷のカモ猟場)にて、日の出前発砲が無い監視。その後、特定猟具使用禁止区域(銃)を車で回り、違反者がいないかの確認。その後、河川敷に戻ってマナー違反などを監視しつつ、聞き取り調査などを実施してパトロールは終了した。その後、鳥獣保護員(猟友会支部長)の方が、河川敷で犬を使った出合数調査(キジ)を行い、解散となった。

(2) 群馬県

ヒアリング対象者が実施したパトロールは、主に警察と連携して道路における狩猟検問とこのことであった。これから出猟する狩猟者への検問となるため、このときに出合数の聞き取り調査は実施していないとのこと。

2. ヤマドリについて

(1) 福井県(福井県猟友会:田村氏(犬による鳥猟実施者))

➤ 初猟日のハンターの動向

- ・ 初猟日はどんなに悪天候でも必ず出猟する。
- ・ 初猟日に出猟する場所は、鳥撃ちも獣撃ちも毎年ほぼ同じ場所に固定されている。
- ・ 鳥撃ちメインのハンターがまずメインで狙うのはカモ(河川敷)。カモ撃ちが一通り終了すると犬を持っているハンターは河川敷などで、キジに狙いに切り替える。
- ・ 福井県は他県(大阪方面)からの鳥猟ハンターも多い。ただし、彼らの初猟日の情報はほとんど収集することはできない。

➤ ヤマドリ猟について

- ・ 猟に入りヤマドリを取り逃がした場所には、だいたい1週間ちょっとで戻ってくる(ただし、他の鳥が侵入した場合は早めに帰ってくるらしい)。
- ・ ヤマドリ猟に関しては、県内のハンターが実施することがほとんどで、カモやキジなどのように県外から入るハンターはないだろう。
- ・ 糞でヤマドリの居場所の検討をつける。オスメスの区別は糞ではわからない。
- ・ ヤマドリは保護区や銃猟禁止区域に近い山に多く生息する。
- ・ ヤマドリのメスが出現するときには、1個体だけと言うことはほとんどない。だいたい2~3個体の群れで出てくる。多いときで5~6個体の群れに出会うこともある。
- ・ 猟をしていて、メスだけしか確認しない日もある。
- ・ 出猟した際、オスよりもメスの方が絶対に出合が多い。

➤ ヤマドリの生態について

- ・ ヤマドリが好むのは、スギ林内のコケが生えている沢。このコケを食べるためと水を飲むために朝一番に上から降りてくる。また、鬱蒼としてシダが繁茂しスギ林が点在している様な環境も必要で、シダの茂みの中を罫として利用している。
- ・ ヤマドリの好む場所は、オス個体を捕獲してもすぐに別のオス個体が入るためいなくなるようなことはまずない。
- ・ ムカゴ（山芋）の多い場所には、ヤマドリも多く生息している。
- ・ 大型獣を狩猟する人も同じような場所に出かけるので、大物猟の方もヤマドリを見かけることもあると思う。

➤ ヤマドリのオスメスについて

- ・ オスは真っ赤なのですぐにわかる。飛んでいる姿は火の玉のよう。
- ・ メスは尾羽が丸く（キジはメスでも尾羽が少し出る）、体色が茶色なので判別は可能。
- ・ 最近ヤマドリのメスは増えていると思う。
- ・ 1年を通じて、オス1個体に対して、メス5～6個体が付いている。それらの群れの生息範囲は1つの谷を含んだ1kmくらいだろう。
- ・ 年老いたオスは生殖能力が無くなっているにもかかわらず若いオスを追い払って縄張りを維持し続ける。これにより繁殖率が低下してしまう。
- ・ このため、年老いたオス個体はすぐに捕獲して排除する必要がある。
- ・ 糞の形でオス、メスを区別することはできない。

➤ 出合数調査について

- ・ シーズンが終わる頃、供養会として飲み会を行う（全ての支部でやっているわけではない）。このときに各猟師に、どこで出合ったか等を聞き取る。ただ、同じ山に複数回入っていることもあり、重複個体がある可能性もある。
- ・ 福井では、初猟日に雪が降ることは少ない。山に雪が降るとヤマドリが麓に下りてくるので、そこからヤマドリ猟を開始する。福井県でヤマドリ猟を行うハンターが初猟日にヤマドリを撃ちに行くことはまずない。
- ・ 初猟日だけの調査結果だとデータが少なくヤマドリの生息数を判断することはできず、あまりあてにならないと思う。
- ・ 初猟日から1ヶ月間や猟期終了前に出会った数を集計した方がデータ数も多くなり、生息数を判断するための確実性は増すと思われる。
- ・ 猟場で他のハンターに出会うことはあるが、知人なら一緒に猟をしたり、谷を分けたりするので、出合数調査のデータが重複することはあまりないと思う。
- ・ ヤマドリやキジを狩猟対象とするのは、全猟（全日本狩猟倶楽部）に属しているの方が多だろう。ただ、全猟に属していても犬持ちは減ってきている。

(2) 群馬県(群馬県猟友会:青木氏(犬による鳥猟(ヤマドリ)実施者))

➤ 初猟日のハンターの動向

- ・ 初猟日が雨だとカモ猟は出猟するが、渉猟の人はあまり出猟しない。鳥の動きもあまり良くない。

➤ ヤマドリ猟について

- ・ ヤマドリの目撃について、今年は2回出猟しているが、全く見ていない。ちょうどヒナが30日くらいの時に台風が来たので、その影響ではないかと考えている。
- ・ 出猟以外にシカの調査で群馬県の赤城に入山(12月3,4,5日)した。その際オス2、メス2を目撃した。
- ・ 雨で鳥のにおいが流されることはない。寧ろ犬を使った鳥猟では雨上がりが一番良いといわれる。逆にダメなのは風の強い日。(においが流れてしまう)
- ・ 鳥猟の難しさはカモ キジ ヤマドリといわれるようだがそのような事はない。地域によると思う。自分はヤマドリから始めた。新潟では、カモの人气が高くカモ猟を行う人が多い。
- ・ 良好な猟場はカール状地形。水のない沢でもよいが、雪が積もっても餌となるシダの葉が出ている場所を好む。
- ・ 同じ場所で猟をしてオスを捕獲しても良い環境には周囲からすぐに別個体が入ってくる。
- ・ 同じ猟場に一日通ったとき、午前ハセッターを使って3羽確認(うち1羽捕獲)し、午後は柴犬を使って17羽(オスメス混合)確認したことがある。
- ・ 糞、食痕等でヤマドリの存在はわかる。シダに残された食痕は先端の柔らかいところが食べられているのですぐにわかる。
- ・ 雪が多く、地形が急峻な地域では、鳥が麓に降りてきてから猟をする。
- ・ 自分のグループでは3人しか鳥撃ちがおらず、そのうちヤマドリをやっているのは自分だけである。
- ・ 神奈川の知人から、昨年ヤマドリのつき場が変わったという情報を得ている。シカなどにより林床が攪乱されたことが原因の一つと考えている。

➤ ヤマドリの生態について

- ・ ヤマドリの生息地としては、植林地の林齢が高いところでは林床が開いてしまってだめ。林床にシダやボサがあるところがよい。
- ・ スギゴケを好みよく食べている。また、捕獲したヤマドリの素囊の中を調べたことがあるが、ほとんどジュウモンシダであった。
- ・ ドングリやアカガエルを食べている個体もいるが、全ての個体ではなく、個体差はあると思う。
- ・ ヤドリギの実を食べるとい人もいるが、胃内容物から見たことはない。
- ・ 当年のヒナはオスメスともに親の縄張りに一緒に留まっていることが多いが、9~10月になると当年のオスは擬発情して、兄弟同士でつつき合い始め、排斥するようになる
- ・ ヤマドリの生息場所は、地域によって差はあり、群馬では標高1000mより上にヤマドリ

が生息するが、新潟では標高 300m でも生息する。

➤ ヤマドリのオスメスについて

- ・ オスの体重は重くメスとは羽音が違うため、飛び立ちの羽音でオスメスが区別できる。
- ・ オスは縄張りに侵入した犬に対してもホロ打ちするのでわかる。
- ・ 糞でオスメスの区別はできない。ただ、寝や（ヤマドリが寝た場所）でため糞（タヌキの糞のように大きいもの）を見たことがあるが、オスのものかもしれない。

➤ 出合数調査について

- ・ ヤマドリは、大物猟をやる人の方が見ると思う。また、自分の狩猟対象ではないので、情報も出てきやすいと思う。
- ・ 猟友群馬（猟友会の会報）にしばらく出合数調査の結果が掲載されていた。猟をしているとメスの数の方が多いと思われるが、調査結果はオスの数の方が多かった。オスの方が多く報告された理由として、報告者がオスメスの区別がしっかりできていないか、聞き取り者の聞き方に問題があるかもしれない。
- ・ 近年、ヤマドリの個体数はオスメス共に増加していると思う。これは狩猟者が減少しているのが一因かもしれない。
- ・ 群馬では初猟日の朝に幹線沿いを通る狩猟者の車を停めて、聞き取りをしているが、まだ猟をしていない時間帯なので、データにならない。そのあと、しばらくして解散するので、夕方の聞き取りはできていないのではないか。
- ・ 狩猟者のデータに頼るのは限界なのではないか。どちらにしても狩猟者数が激減しており、別途調査手法を考えるときに来ていると思われる。